

日吉学



実験授業「日吉学」～ Deep な日吉を記録し、語る

日吉キャンパスは、自然や歴史の遺産の宝庫なのです。しかしこのことは、学生たちにはほとんど気がつかれることもありません。その遺産にスポットをあて、歩き、見て、聞いて、学ぶ授業が、実験授業「日吉学」です。同じ日吉で学ぶ普通部・高等学校の一貫校生も交え、一緒になってフィールドワークを行い、ディスカッションしますが、今年は未来先導基金の支援を受け、8台のGPS内蔵のiPadを導入しました。これにより、発見・観察した動植物や、遺構、地形や風景などを、位置情報とともに写真や動画に記録したり、歩いたルート自体も記録したりすることができるようになりました。それを教室に持ち帰ってそのままディスカッションやプレゼンテーションで活用することもできます。そして、授業時間限りではなく、今後に残る日吉アーカイブとして活用できるようにすることを目指しています。3年目となる今年の日吉学ですが、今年は春学期3回、秋学期4回の通年で開講しています。(有川智己)

日吉の森で生物多様性デジタルマップを作ろう

このプログラムの目的は、日吉の森の春をデジタル画像で記録し、インターネットで閲覧できるデジタルマップを作ることでした。日吉の森は広いので、3つのグループに分かれ、異なるルートを散策しました。約1時間半掛けて、木や草の花、鳥や虫、美しい風景などをiPadで撮影し、教室に戻ってノートPCにデータを取り込もうとしたのですが、iPadの位置情報が取り込めないというトラブルが発生してしまいました。そこで、グループごとにお勧めの生き物や風景の画像を選び、自分たちのルートを紹介するスライドを作ることにしました。最後に各グループがそれぞれスライドショーを行いました。同じキャンパス内ですが、各グループのスライドに出てくる風景や生き物はかなり異なっており、まさに日吉の森の多様性を感じることができました。デジタルマップは今後の課題となりましたが、日吉の森の生物多様性を理解することはできたと思います。(福山欣司)

歩いて、見て、考える、日吉の戦争遺跡

日吉は理想的新学園として建設されましたが、やがて塾生を戦場に送り出す場になり、海軍によって校舎が使用されました。戦争末期には寄宿舎に連合艦隊司令部が入り、地下には巨大な軍事施設群が建設されることになります。この回では、地上と地下、過去と現在を往還しながら、自分自身の足元を見つめました。

まず教室でキャンパスの歴史と地下壕の概略を学び、グループに分かれて壕内を見学。地下作戦室では、学徒出陣で特攻した先輩(上原良司氏)が出撃前夜に記した「所感」を全員で読みました。その後、寄宿舎などを見学し、日吉に落とされた焼夷弾の筒や地下壕の遺物を手に取りながら、グループで感想や意見を出し合いました。日吉で何があったのか、自分と同じようにここで学んだ先輩が何を思い、何を考えていたのか。日常の空間から少し離れることで、戦争や平和について、大学で学ぶ意味について考えるきっかけになったのではないかと思います。(阿久沢武史)



日吉は地図と地上観察で遊ぶとこんなに面白い！

「日吉学」も3年目を迎え、地図で日吉を観る材料に新しく「日吉キャンパスマップ」が加わりました。素材となった詳細な地形図は日吉の地形の成り立ちの謎を多く語っています。地図の太田弘(普通部)、中世史の高橋傑氏(普通部)の解説に加え、路上観察のエキスパート「東京スリバチ学会」の皆川典久氏、石川初氏(政策・メディア研究科)が登壇しました。座学では地形観察の視点のポイントを学び、2班に分かれてフィールドワークへ向かいました。今回から明治初期の地形図「迅速図」の画像を参照できるiPadを持って、100年前の地図上の正位置で現代の景観を比較しつつキャンパス周辺を歩きました。後半の分析・討論会では「キャンパス周辺の里山景観をいかに残し保存していけば良いか」や「日吉の地形には形成史の不思議がある!」などの議論で盛り上がり、「過去は現代を知る鍵である」の名言通り、日吉の過去と今を地図で旅する良い学習の機会となりました。(太田弘)

情報の教養学

情報と社会

2015年度の「情報の教養学」では、情報が社会にどのような影響を与えているか、また今後どのように影響を与えうるかに着目しています。一言で「情報」と言っても、体内の神経レベルの情報、データ解析して得た情報、報道機関が発する情報など様々なものが存在します。こういった多種多様な情報と社会の関係を、一流の講師により、春・秋学期を通じて合計6回の講演をいただいています。春学期では、まず岸井成格氏（毎日新聞社）が、現在を歴史の転換期ととらえ、その中での報道の役割について講演しました。次に、牛場潤一氏（理工学部）は、脳を情報システムととらえたりハビリについて解説しました。最後に、新保一成氏（商学部）は、インドにおける様々なデータの解析結果をもとに貧困を考察しました。いずれの講演も大盛況でした。なお、秋学期は、歴史（黒沢文貴氏（東京女子大学））、経済と社会（岸博幸氏（メディアデザイン研究科））、著作権（福井健策氏（弁護士））に関する講演をいただいています。

（高田眞吾）

歴史の転換期と報道の使命

全学部からの参加がありましたが、特に法学部1年生の参加が目立ちました。塾員でもある岸井成格氏は、テレビのレギュラー番組収録の合間を縫って講演に駆けつけて下さいました。アンケートにも「現代の日本、世界をとりまく問題・現状について非常に熱いご講義をして頂き、とても大きな刺激を受けました」とあった通り、様々の現代情勢の報じられ方、報じ方について、知られざるエピソードと率直な意見を交えて熱心にお話し下さいました。報道に対する圧力への毅然とした態度、相手の立場に立った取材態度、正確な裏付けなど、いずれも情報を扱うプロフェッショナル達の心構えは、私たちも見習うべきものです。アンケートの中に、「質問したいことが山ほどあったので個別の

質問に時間をもう少しとって頂きたかったです」という意見がありましたが、これは運営側の反省点です。興味深い講演ほど、もっと講師の話を聞きたいという気持ちと質問をしたいという気持ちが半ばするアンビバレンツな状況になりますが、今後の宿題とさせていただきます。

（小菅隼人）



脳を知り、脳を治す

この講演では、私の専門である脳研究において、いかに情報学のツールや考え方が使われているかについて焦点を当てながら、脳卒中片麻痺やジストニアといった病態脳がもたらす、運動障害の原因や治療方法について話をしました。手を伸ばしてコップをつかもう、と私たちが頭のなかで考えてから、実際に自分の手が動き、ほどよい力加減でコップを握って落とさずに持つ、一瞬のうちになにげなくおこなっている一連の動作は、正確な運動命令の生成と、視覚や体性感覚に基づく誤差修正や運動学習が、絶えず脳のなかでおこなわれることによって実現しています。病気によってその情報の流れが淀んでしまっても、脳波や磁気共鳴画像とよばれる、非侵襲的に脳の活動パターンを可視化する技術によってその状態を診断し、適切な脳活動が再び生成されるように外骨格ロボットで麻痺手の運動補助をしていくと、脳のなかには情報流路が新しく構成されていきます。脳がおこなっている情報処理のしくみを理解し、それを再構成すること。脳の活動をリアルタイムに読み出すことや、ロボットを上手に制御すること。これからは、こうした情報学が神経医療の創出に欠かせない時代になってくるかもしれません。（牛場潤一）



貧困を測る

歴史統計によれば紀元1年から1000年ほどの間、どこの国でも人々は貧しく、1日に1.5ドル程度の生活をしていました。しかし、続く1000年で現在の先進国に暮らす12億の人々は貧困から大脱出し、他の地域に暮らす58億人の約半分、特に南アジア、サハラ以南アフリカに暮らす7割以上の人口が1日に2ドル以下の生活から未だに脱出できません。貧困とは、人々が自由でその能力を十分に発揮できない状態を意味します。その意味で経済的な側面だけでなく健康や教育の達成度も問題です。5歳未満児童死亡率の急速な低下で、途上国の人々はこの60年間で25歳長生きになりました。それでも農業中心の生活にはリスクが多く、インドのデータに計量経済学的手法を適用すると、天候や自然災害の影響で生活基盤が失われ貧困状態に陥る可能性のある家計が、現状で貧困とカウントされる家計の約3倍あることが明らかになりました。貧困である人々の状態を緩和する政策と貧困から脱出した人々が再び貧困に戻るのを防止する政策では、その内容が大きく異なります。今後利用可能なデータが増えることが予測される中で、経済理論に基づく統計的な分析の重要性を理解していただけたかと思います。

（新保一成）





セミナー を問う」

とつ、わたしが今こ
なんてうつくしい問い

これが今回、庄内セ
た問いでした。それ
、講演者として登壇
の先生方にも向けら

徒もいませんでした。

として自身の生を抱き

に体当たりし、思い

両手に抱えきれない

した。持ち帰られた

のものであり、それら

に感されながら、しず

っていました。

つくしく、いとおいしいも

かその苦しみがわか

合うわたしたちにしか

確かにあの場所で

呼吸をしていました。

験ができたのは、ま

という問いありきで

に触れてしまっは、

生きることはできない

庄内セミナーとは強烈

学部4年 高橋慶)



実施期間：8月28日（金）～8月31日（月）[3泊4日]
場 所：慶應義塾大学鶴岡タウンキャンパス他
参加人数：学部学生15名、院生1名、社会人1名、
スタッフ7名 合計24名
講 師：三村将（医学部教授）、山内志朗（文学部教授）、
東山昭子（鶴岡総合研究所研究顧問）
参 加 費：学部学生・大学院生：2,000円、社会人：10,000円
※ 現地までの往復交通費は自己負担（現地集合・現地解散）
宿泊場所：休暇村羽黒（鶴岡市）

【関連企画】

- ・生協の協力により生協食堂1階で庄内米を提供（6/8～12）
- ・日吉メディアセンターとの協力で庄内関連図書を展示（6/8～7/25）

スケジュール

1日目	・現地集合（鶴岡市 TTCK） ・「生命」に関するマインドマップ1作成 ・「庄内にまなぶいのち」 講師：東山昭子（鶴岡総合研究所顧問）
2日目	・即身仏拝観（注連寺） ・松ヶ岡開墾場見学 ・庄内藩校致道館で庄内論語の素読 ・鶴岡市内見物 ・「人は死ぬとき何を思うか——精神科からの問題提起——」 講師：三村将（医学部精神・神経科学教室教授）
3日目	・ミニ修験体験 ・「湯殿山——世行人における生と死の作法」 講師：山内志朗（文学部教授）
4日目	・慶應義塾大学先端生命科学研究所見学 ・マインドマップ2作成 ・懇親会 終了後現地解散

カドベヤ



庄内、インド、カドベヤ

2015年の6月からいよいよ満6年に向かい始めたカドベヤ。2015年の夏の暑さを吹き飛ばす「親子イベント」が今年も開催されました。8月18日に開催された「土人形の夕べ」は、今回で3回目を迎えました。庄内地方で今も息づく鶴渡川原人形の作り手さんがたの指導の下に、今年は「軍配持ち」のお人形に絵付けを行いました。3年間通いつめてくれた子供たちは、もう筆さばきも慣れたもの。黙々と小さなお人形に向かいます。そして続く8月25日にはカドベヤ初の映画上映会を開催しました。インドの黄金寺院のドキュメンタリー『聖者たちの食卓』（2011）です。いまだにカースト製の厳しいインドで、人種も階級も宗教も関係なく、来る人々すべてに豆のカレーをおなか一杯に提供する黄金寺院。食材を提供し、小麦の薄パンを作り、大きな鍋でカレーを作り、振る舞い、後片付けを行うのも、人々。上映会の後は、本格的なインドのカレーを参加者全員で味わいました。カドベヤも石川町の小さな黄金寺院でありますように願いつつ、夏が過ぎていきました。（横山千晶）



実験授業「身体知・音楽（発展・声楽）」クラスについて

この授業は住友生命保険寄附講座「身体知・音楽 I II」の既修者を対象として、さらに音楽の身体知を高めるための授業として開始しました。教養教育における音楽教育は、音楽家養成が目的ではありません、音楽文化のより深い理解者、担い手を育てるためには、単に受動的に音楽を鑑賞するのではなく、より身体に根付いた音楽の理解力が必要である、そうした理念のもとに教育を展開しています。

具体的には、声楽家の川田早苗氏と古川精一氏により高度な発声や声楽アンサンブルのレッスンを少人数単位で行いながら授業を進めています。そして10月24日には協生館で「身体知・音楽 I II」クラスと共同で演奏会を開催しました。2月には花巻市・大槌町で、震災支援を兼ねてクラスの成果発表を行う予定です。

なお本実験授業は、株式会社龍角散・公益財団法人かけはし芸術文化振興財団・株式会社白寿生科学研究所の協力で実現しました。深く感謝いたします。（佐藤望）

HAPP

日吉行事企画委員会（HAPP）は春学期に新入生歓迎行事を実施しています。秋学期には、塾生および教職員から企画を募集し、審査を経て採択した催し物を主催・開催しています。2015年度の新入生歓迎行事は、8つの企画（計9回の催し物）が行われます。毎年恒例となっている、舞踏の公演、塾名誉教授や著名者による講演会、塾長との交流を目的の一つとしている「塾長と日吉の森を歩こう」、複数回の演奏会を含む「日吉音楽祭」に加え、4年に一度の大イベントであるFIFA女子ワールドカップにおいて、決勝に進出した日本代表チームを応援する催し物など、さまざまな企画が行われました。ちなみに、秋学期のための企画公募の審査も順調に行われ、今年度は12件の応募がありましたが、審査の結果、6つの企画が採択されました。HAPPの活動の詳細は、HAPPのホームページをご覧ください（<http://happ.hc.keio.ac.jp/index.html>）。（石井明）

2015年度新入生歓迎行事一覧

No.	企画名	日程
1	大学体育施設紹介と体力測定&プール開放	4月7日（火）～ 4月13日（月）
2	大野慶人舞踏公演「花と鳥：内部と外部」	4月24日（金）
3	〈物語の世界〉 『『ガリヴァー旅行記』の楽しみ方 —文学、絵画、映画、そして人間理解—	4月28日（火）
4	〈ことばの世界〉 「軽蔑的即席造語の二つの型」	5月8日（金）
5	塾長と日吉の森を歩こう	5月9日（土）
6	ゲキ×シネの世界〈髑髏城の七人〉	5月19日（火）
7	FIFA女子ワールドカップ カナダ2015決勝 日本代表を応援しよう！	7月6日（月）
8	日吉音楽祭2015	7月5日（日） 9月26日（土）

学習相談

2015年度春学期学習相談活動報告

今年は相談員の数も23人と大幅に増え、相談件数も昨年度比で60件ほど増加し、たくさんの方に相談に来ていただきました。例年よりも相談業務の開始時期を早め、GW期間に課されるレポート等への相談も受け付けられる体制としました。また、相談活動に先立ち、学習相談としては初めての試みとして、新入生を対象としたトークセッション（4月16日）を主催しました。定員数を上回る参加があり、参加者からは「大学生活のイメージをつかむことができた、過ごし方の参考となった」との声を多数いただきました。例年好評のレポートの書き方講座（5月25日、28日、6月4日）や展示企画「ちょっと待ってちょっと待ってお兄さん！正しいスケジューリングって何ですか？」（6月19日～7月30日）等のイベントも行い、塾生の学習面の悩みを幅広くサポートしています。（友野詩穂）

レポートと向き合う姿勢

前期では学習相談の一貫として日吉の学部生に向けたレポートの書き方講座を開設しました。基礎編ではレポートの書式や構成の仕方といったレポートそのものへの理解について、発展編ではそのレポートの内容についてテーマ設定やそのテーマの意義を深める方法について説明しました。個別で受けるレポート相談では、課題に対してより的確で目的合理的な“解答”を教えてほしい、といったものが多く見受けられます。しかし今回のレポート講座では、レポートを課題として便宜的に消化していくのではなく、一つひとつの研究として捉え、より高度な学術性を追求するようなレポートへの真摯な“姿勢”を持ってほしいという願いを込めて登壇させていただきました。

今後も学問分野別の講座やプレゼンテーションの講座等を積極的に設け、学習相談活動をより充実させていきたいと考えています。（社会学研究科修士課程1年 原田早春）

「新入生歓迎トークセッション」、なにかのきっかけになってくれれば

新入生は当然誰も期待と不安を持つものであり、大学に関しては特に大きいと思います。様々なイメージが先行していたり、中学や高校とは違う空気に戸惑ったりなど、私自身も入学当時、少なからず頭を悩ませていました。そこで今回、新入生たちにとってなにかのきっかけにでもなってくれればと思い、学業や生活面に重点を置いたトークセッションを企画しました。先輩である我々の経験や失敗談を、是非新入生たちに活用してもらおうといった狙いです。幸いにも様々な学部の友人たちが、快く登壇を引き受けてくれ、また嬉しいことに当日は多くの新入生が参加してくれました。テスト勉強についてから留学に関すること、また学部の転部経験など幅広い範囲で、かつ学部ごとに配慮した内容になり新入生たちにとっても、有意義なものになったと思います。本企画は司会をしてくださったピア・メンターの松本さんや宮前さん、そして多くの方々に協力していただきました。あらためてこの場を借りて感謝申し上げます。（経済学部3年 周彦甲）

研究サポート「研究の現場から」

〈第13回〉民衆教化と学問知—中世後期ヨーロッパの説教

ちょうど800年前の1215年、カトリック教会は全信徒に、年に一度は自らの罪を司祭に告白せよと第四ラテラノ公会議で義務づけました。それが可能であるためにはすべての人がキリスト教の教義の基本的な理解をもつ必要があります。説教は最重要手段として活版印刷以前のマス・メディアになりました。説教の主要な目的は民衆教化でしたが、適切に説教をおこなえる学識ある聖職者の訓練が不可欠でした。今回私は、この二つが矛盾せずに達成されうる場合が説教におけるイメージと記憶術の利用に、鋭く矛盾する場合が聖書の引用方法に見られると論じました。日吉の同僚たちに私の研究をお話し議論していただく機会をいただき感謝しています。（赤江雄一）

〈第14回〉哲学を立ち上げる—プラトン対話篇を読む営みから

「哲学（知への愛）」は、全学問の基礎であると同時に、それ自体は学問とは言えない側面をもつ不思議な営みです。私は、専門研究の一つというより、人間が自覚的に生きるあり方だと思っています。私たち各人は「哲学すること」をどのように立ち上げられるのか、それを古代ギリシア哲学から考えています。

プラトンは師ソクラテスを主人公とする戯曲形式で著作しました。多くの人物がいきいきとした対話を交わす中、著者プラトンは不在です。この特異な哲学書形式は私たち読者に問いかけ、時代や背景を越えて対話に参画するように促しています。拙著『プラトンの哲学』（岩波新書）を踏まえて、「超越、愛、魂、理想」を語る、生きた哲学の可能性を議論しました。（納富信留）

第15回「研究の現場から」——研究と人の交差点——

来往舎にはたくさんの研究者がいるにもかかわらず、どのような人がどんな研究をしているのかを知る機会はなかなかありません。同じ階なのに一言も話したことがないご近所さんも少なくないことでしょう。多くの人が行き交うのになぜか孤独を感じる来往舎を、もっと活発で温もりのある、研究者の交流の場にしたいという思いからスタートしたのが「研究の現場から」です。15回目となる今回は12月9日の予定です。新人の北川さん、そして留学帰りの津田さんにご自身の研究のお話をさせていただきます。和やかで気楽な交流の場ですので、どうぞ気軽に立ち寄りください。（工藤多香子）

12月9日（水）18:15～ 来往舎101にて

・津田真弓（経済学部）

「柳桜亭江戸廻花也—長州藩主毛利斉元の狂歌遊び」

・北川千香子（商学部）

「オペラ／音楽劇における沈黙の諸相」

〈第13回〉『健康の庭』—15世紀印刷本草の挿絵からみえること

1485年にマインツで出版された『健康の庭』は、印刷本の本草（薬草辞典）としては最初期のもので、木版挿絵が400枚近く挿されているのが特徴です。序文にはこれらの挿絵について、薬草を正しい色と形で描写しようと努めたこと、そのために画家をエルサラムへの巡礼に同行させ、旅先で現地の薬草を描かせたことが述べられています。この序文を出発点とし、本書の挿絵に関する諸問題について論じました。例えば、本書の挿絵の様式には、伝統と写実の混在が見られることや、実際にはエルサラムで描写された挿絵はなかった可能性が高いことなどです。また、本書の読者層として、医療従事者のみならず、知的好奇心を持った非専門家も想定されていたのではないかと仮説を展開しました。（池田真弓）

〈第14回〉聖なる血筋の記録—インドネシアと南アラビアの事例

本発表では、イスラームの預言者ムハンマドの子孫たちが現在まで記録し続けている系図についてお話ししました。預言者につながる血筋は多くのムスリムたちに特別視されており、現在までその血をひく人々は社会の中で尊敬を集めています。発表ではそうした血筋を記録する文献をスクリーンに映しながら、含まれている情報や記述方法の特徴を説明することに加え、著者による「遊び」や写本としての芸術性を紹介することに重点を置きました。また、ジャカルタを拠点に東南アジア各地で系図文献を収集している方の活動を紹介し、聖なる血筋を記録する作業は有志による草の根的な活動によって支えられていることを明らかにしました。（新井和広）

注目！ 研究会助成制度

この助成制度は教養研究センターの所員が企画する研究会やワークショップを支援することによって、さまざまな研究・教育の企画が日吉で開催される機会を増やすこと、また所員に公開していただき日吉における研究の情報交換の場を広げることを目的とします。助成は開催に伴う経費（謝金、印刷費など1件上限10万円）と日吉キャンパス内の広報の支援を負担します。年2回1月と7月の月末に締め切ります。春学期の企画は1月、秋学期分は7月にご応募下さい。次回の締切は1月29日。詳細は教養研究センター事務局へどうぞ。

求ム・来往最前線情報！

所員の方々の研究・教育のご紹介をします。勉強会、研究会、講演会、ワークショップのお知らせ（日時・内容・研究会名・担当教員・連絡先）、著作刊行物がありましたら、情報をお寄せ下さい。教養研究センターへ：toiawase-lib@adst.keio.ac.jp

【日吉キャンパス公開講座】色と紋様の世界

10月3日(土)～12月5日(土)全8回16コマ
3時限(13:00～14:30)、4時限(14:45～16:15)
第4校舎J29番教室(11月28日のみJ11番教室)

【神奈川県ヘルスケア・ニューフロンティア講座】文化としての病と老い

10月6日(火)、10月27日(火)、10月31日(土)、
11月17日(火)、12月15日(火)、2016年1月16日(土)
第4校舎J11教室
(10月31日:来往舎大会議室、1月16日:来往舎シンポジウムスペース)

【HAPP】8Hands' Piano Performance vol.2

11月2日(月)18:30～19:30 来往舎イベントテラス

【情報の教養学】第5回:岸博幸
日本経済は再生するか～構造変化の現実を理解しよう～

11月4日(水)16:30～18:00 来往舎シンポジウムスペース

【HAPP】

たかまつなの笑えて学べるニュース～国際協力編～
12月1日(火)19:00～21:00 来往舎シンポジウムスペース

第15回【研究の現場から】

12月9日(水)18:15～ 来往舎101 →特集V

【日吉学】第6回 日吉のアーカイブマップを作ろう!

12月12日(土)13:30～17:00 第4校舎B棟22番教室

【学習相談】2キャンパス合同トークセッション
研究の始め方・続け方——それがお前のやり方か!?

12月16日(水)16:30～18:00 予定
湘南藤沢メディアセンター1階オープンエリア

【日吉学】第7回 個人のアイデアを融合して革新的な
アイデアを生み出すには?

12月19日(土)13:30～17:00 第4校舎B棟22番教室

【学会・ワークショップ等開催支援】春学期開催分募集
申請締切 2016年1月29日(金)【極東証券寄附講座アカデミック・スキルズ】
プレゼンテーション・コンペティション

2016年2月5日(金)14:00～18:00 来往舎シンポジウムスペース

今秋の「日吉キャンパス公開講座」は、「色と紋様の世界」をテーマとして10月3日から12月5日までの土曜日(10月24日、11月21日を除く)13時より、計16講座が開催されます。私たちは多彩な色彩に囲まれて生活しています。色の本質と物性、空、海、夕焼けなどの自然環境の色、花々や木々や動物の色の現れ方と効果、心理学的効果、日本文学、美術、音楽などの中の「色」、また、化粧や衣服の色、遺伝子組み換えによる青いバラの話題など、心理学、生物学、物理学、文学、美術、染色、ユニバーサルデザインなどの様々なアプローチから「色と紋様の世界」を取り上げます。多彩な「色はいろいろ」の世界をのぞいて見ませんか?(秋山豊子)

【日吉学】第5回

めざせ縄文人——日吉の森で食べられる実を探そう——
11月7日(土)13:30～17:00 第4校舎B棟22番教室

【実験授業】パフォーマティブ社会学への誘い

12月3日(木)16:30～19:30 来往舎大会議室

【HAPP】芝浜

12月12日(土)①13:00～14:00 ②16:00～17:00
日吉メディアセンター1階ラウンジ

【学会・ワークショップ等開催支援】

日吉电影节 2015

12月15日(火)～16日(水) 予定

【情報の教養学】第6回:福井健策

次世代著作権～激増するコンテンツを握るのは誰か
12月16日(水)16:30～18:00 来往舎大会議室

【学会・ワークショップ等開催支援】

ナターリア・ペトロフスカヤ氏講演会

2016年1月23日(土) 予定

【教養研究センター選書出版】

2016年3月予定

*各イベントへのお問い合わせは、toiawase-lib@adst.keio.ac.jpまで

私のバレエ好き自慢

6月から教養研究センターに配属されました池本です。自慢とは呼べないかもしれませんが“大好き”自慢を。
幼い頃、テレビでバレエダンサーをひとめ観てクラシックバレエが大好きになりました。畳の上で踊る真似をすぐに足首を捻挫、包帯ぐるぐる巻きで可愛い靴が履けなかったために幼稚園入園式の集合写真は唯一足が入った長靴で写っています。(いいお天気だったそうです!)

習う機会のないままくすぶる気持ちを抱えて大人になり、思い切って習い始めたのは社会人3年目。恥ずかしさを忘れると強いです。バレエ公演を片っ端から観に行くようになったのもこの頃です。ダンサーはもちろん、舞台装置、指揮者やオーケストラ、そしておこがましいですが私たち観客も……全てが混ざりあって出来上がる、二度とない舞台空間。バレエは台詞がない分、ダンサーの顔だけではなく手や足、体全体の“表情”を味わえます。人間の身体って美しい、その美しい身体を存分に活かして色々な感情を表現できるなんて素晴らしい。しばらく椅子から立ち上がれないくらいの感動を覚えた公演もあり、とても印象深い思い出です。

そんな大好きなバレエも、小さい娘を抱える今では全く行く機会がなく、たまにテレビで放映される公演をちらちら見るのが関の山。いつか娘がバレエを好きになってくれれば、一緒に存分に味わいたいなあと思う日々です。

(池本晶子)



Newsletter
November, 2015. No.27

慶應義塾大学教養研究センター (Keio Research Center for Liberal Arts)

発行日: 2015年11月30日 代表: 小菅隼人

〒223-8521 横浜市中区日吉4-1-1 TEL: 045-566-1151 Email: lib-arts@adst.keio.ac.jp

http://lib-arts.hc.keio.ac.jp/